

東総の主要集落・郡家と郡郷（下）

糸川道行

前稿をうけて

本稿は上下に分割したうちの後半の原稿である。前編は『研究連絡誌』85号に所収されている（糸川 2021b）。ここではそれを前稿とする。章立て・図番号・注については前稿からの通し番号とした。

3 東総の郷家集落・主要遺跡・庄家遺跡の検討

本項では主として東総各郷における郷家集落及びその候補遺跡をとりあげるが、その認定が難しい場合も多いため、各郷における主要な遺跡もみる。また墨書土器や掘立柱建物群等の様相からうかがえる庄家³⁾の可能性のある遺跡についてもとりあげる。

なお本項では、掘立柱建物が見つかった比較的大規模な集落を念頭に遺跡を選別している。そのため長文墨書土器が多く出土した吉原三王遺跡や、信仰面の遺構・遺物が豊富な多田日向遺跡などは簡略なあつかいである。別方面からみれば重要な遺跡でもとりあげない場合がある。

本項で対象とする遺跡の特記事項については第1表に記載した⁴⁾。遺構の数量については記載しない場合が多いが、記載した場合はとくに断りのない限り、奈良・平安時代に限定する。

また東総三郡には、木内廃寺・龍正院廃寺・名木鎌部廃寺・八日市場大寺廃寺という主要な寺が存在する。山路直充氏はこれらの寺の遺構・瓦について考察し、さらに龍角寺や埴生郡・印播郡も含めて海域と寺、交通という面からも論じている⁵⁾（山路 2012）。寺・瓦については筆者の理解が浅いため、第1表および本項（7）の記載等については、山路氏をはじめ斯学の論考を参考とした。

（1）幡谷宮谷第1遺跡（第5図）

香取郡磯部郷の郷家集落とみる遺跡である⁶⁾。なお、荒海駅に近いことから荒海駅の経営にかかわった集落でもある。198棟の堅穴建物・20棟の掘立柱建物が検出された（第5図1）。掘立柱建物群は3期の変遷が想定されている。B区南部の掘立柱建物群はカワラケの大量埋納をともなう地鎮遺構が2か所見つかったこと

などから中世末～近世初頭の屋敷と推定されている（印文セ 1996・阿部 1999）。しかし「コ」の字形の配置をもつ形態は奈良・平安時代の官衙風建物群（菅原 1998）と共通するものである。中世以降にはこのような配置の建物群は作られないとみるので、筆者はこの掘立柱建物群を奈良・平安時代のものとする。カワラケや地鎮遺構が時期の根拠とされているが、周囲からは奈良・平安時代の堅穴建物や遺物が多く見つかっており、そちらを重視した方がよい。

また幡谷宮谷第1遺跡からは「磯部麻呂」と記載された墨書土器が出土した（第5図2）（阿部 1999）。土器は8世紀初頭頃の土師器杯であり、房総の墨書土器のなかでもかなり早い時期のものである。「磯部麻呂」は底部外面に達筆で書かれており、記入した人物の高い教養がうかがえる。磯部は漁撈・航海に従事し、水産物を貢納する職掌をもつ職業部の部民姓である。「磯部麻呂」は部民姓が郷名となった磯部郷に居住する郷名と同名の人物である。この墨書土器の存在により、幡谷宮谷第1遺跡が磯部郷内にあることが物的にも判明した。幡谷宮谷第1遺跡は掘立柱建物群等の様相から、そのあり方が八千代市上谷遺跡や四街道市小屋ノ内遺跡など、他地域の郷家集落と同様といえる集落である。

（2）長津台2号遺跡（第6図）

匝瑳郡珠浦郷の郷家集落とみる遺跡である。向きがほぼそろった掘立柱建物が17棟以上検出された。路線の調査であり、さらに増えることが確実である。また掘立柱建物群に近い堅穴建物は一辺が6.1m～6.5mでやや大型である。建物群の存続時期について、戸村勝司朗氏は出土土器から8世紀中葉から9世紀後葉までと考察している（戸村・鬼澤 2001）。堅穴建物の歴年代は9世紀前葉から中葉であるが、調査区外に8世紀代の大型建物が存在するとみる。なお開発の加速は8世紀中葉からであるとしても、郷における中心地の選定は8世紀前半のうちにはなされていたと考える。珠浦郷が前代に御前鬼塚古墳を擁した郷であることを考慮すると、8世紀第1四半期までさかのぼる可能性

第1表 東総三郡における主要遺跡等の特記事項

郡	郷	主要遺跡	特記事項
通 瑳	野田	吉田内遺跡	大規模集落か不明 海浜砂堤帯の発掘事例が少ないため記載
	千俣	大寺廃寺	基壇建物1棟・掘立柱建物2棟・寺院機能を区画する溝 龍角寺式の三重園文縁単弁八葉蓮華文の軒丸瓦は龍正院瓦と同一文様 素文縁単弁十六葉蓮華文軒丸瓦は木内廃寺・茨城県稲敷市(旧江戸崎町)下君山廃寺と同様の文様
		柳台遺跡	竪穴建物200棟前後 掘立柱建物の報告なし 古墳時代から続く伝統的な集落 「千俣仏カ」墨書土器、「千校尉」墨書・「九字切り」線刻土器
	山上	八辺窯	未調査 表採遺物から歴年代の一端は8世紀第3四半期頃
		神山谷遺跡	竪穴建物150棟 掘立柱建物の報告なし 古墳時代後期から続く伝統的な集落 7世紀末～8世紀初頭頃の土器群と貝ブロックが密集して出土した地点がある
		城山遺跡	竪穴建物は中世の造成により欠損多
	石室	殿谷遺跡	「通永私印」が出土 通瑳郷所属の可能性もある
		芝崎遺跡	砂堤帯に立地 奈良・平安時代の畑・竪穴建物・掘立柱建物多数
		中島遺跡	砂堤帯に立地 「コ」の字形配置の掘立柱建物群 上総国武射郡の郷名である「畔代」・「足代」・「片野」の墨書土器
	通瑳	台駒形遺跡	「匠瑳」墨書の平安時代土器
		生尾遺跡	竪穴建物・掘立柱建物多数 通瑳郡家・通瑳郷家集落の比定遺跡
		平台遺跡	竪穴建物・掘立柱建物多数 須恵器円面硯 生尾遺跡近隣
	須加	飯倉鈴歌遺跡	6間×4間・5間×4間などの大規模な掘立柱建物
		平木遺跡	第2砂堤帯に立地 道路・若干の竪穴建物・小規模な「コ」の字形配置の掘立柱建物・井戸 多量の墨書土器
	大田	坊ノ場遺跡	第2砂堤帯に立地 大規模集落か不明 砂堤帯の発掘事例が少ないため記載
	日部	池尻遺跡	竪穴建物36棟・掘立柱建物12棟 路線の調査のため集落はより広がる 「日」墨書土器
		桜井釜山台遺跡(干潟桜井遺跡)	精錬炉・鍛冶炉 掘立柱建物の報告なし
		桜井平遺跡	鍛冶炉 掘立柱建物はなし 「総国」・「郡カ軽部」の墨書土器
	田部	二階遺跡	竪穴建物110棟・掘立柱建物41棟 掘立柱建物群の年代は8世紀前葉～中葉 郷家集落候補遺跡
		根崎遺跡	竪穴建物32棟・掘立柱建物21棟 栗山川本流を東に臨む広大な台地上に立地 郷家集落候補遺跡
		西田部向台遺跡	掘立柱建物11棟 遺構数は攪乱による欠損を考慮すればより増加
		コジヤ遺跡	重園珠文縁単弁八葉蓮華文の瓦当文をもつ陶製の瓦当范・平瓦
	珠浦	岩部遺跡	丸瓦
		長津台2号遺跡	掘立柱建物17棟以上 大型の竪穴建物 鉄滓・製鉄炉壁 郷家集落
	原	山中遺跡	蓮花墨画・「真」墨書土器 千俣郷に属す可能性もある
		多古台遺跡群No8地点	竪穴建物271棟・掘立柱建物9棟 郷家集落
		桜宮遺跡	掘立柱建物の分布密度が高い 古墳時代後期から続く集落
	茨城	鶴舞窯跡	土師器出土が伝えられるが須恵器か 詳細不明
		大原遺跡	掘立柱建物33棟 古墳時代から続く集落遺跡だが掘立柱建物多
		俣田遺跡	東方の条山遺跡を含む 竪穴建物50棟・掘立柱建物30棟 古墳時代から続く集落遺跡だが掘立柱建物多 墨書「庄」(8世紀後葉)・「通厨」(9世紀前葉)・「千千or土土」(8世紀後葉～9世紀中葉) 初期荘園の可能性
		林遺跡	掘立柱建物23棟 古墳時代から続く集落遺跡だが掘立柱建物多
		千田の台遺跡	竪穴建物34棟 掘立柱建物は未検出 遺構密度比較的高い 墨書「小野」など 芝山町山ノ台遺跡と同一集落
		大塚台遺跡	小規模集落で掘立柱建物は未検出だが奈良三彩火舎2個体出土 火葬墓群 村落寺院関係ほかの墨書土器 8世紀第2四半期～第4四半期
吹入台遺跡		遺構の分布密度比較的高い	
中村	林小原子台遺跡	「家長」へら書きの骨蔵器・墓誌または売地券とみられる短冊形鉄製品	
	信濃台遺跡	竪穴建物130棟・掘立柱建物18棟(飛鳥～平安) 「(下)総国通瑳郡(玉作)郷」・「千厨」の墨書土器	
海 上	中内原遺跡	掘立柱建物18棟 5間×4間・6間×2間の大型の掘立柱建物 古墳時代から続く集落遺跡	
	大倉	境原遺跡	掘立柱建物66棟 古墳時代後期から続く大集落遺跡 山幡郷の後に大倉郷に帰属
		地々免遺跡	古墳時代後期から続く大集落遺跡 掘立柱建物の報告なし 山幡郷の後に大倉郷に帰属
	城上(城内)	清水堆遺跡	海上郡家比定遺跡
		木内廃寺	海上郡郡寺だが香取郡とも関わる 基壇建物を確認 そのほかの遺構は不明 創建は7世紀末～8世紀初
	麻統	清水入瓦窯	3基の瓦窯 木内廃寺に瓦を供給
		中仁良I遺跡	掘立柱建物4棟 2棟は左右対称に位置
	編玉	駒込II遺跡	130棟程度の竪穴建物(奈良・平安)・掘立柱建物6棟 「戸主古麻呂」の墨書土器
		岩井安町遺跡	古墳時代から続く集落 掘立柱建物なし 「石井」墨書土器が多く出土
	石井	岩井安町南遺跡	岩井安町遺跡と一連の集落 掘立柱建物あり 遺構は調査対象外に続く様相
		横根	古墳時代竪穴建物14棟・方墳1・奈良・平安時代竪穴建物9 (2021・22年度 千葉県教育振興財団調査 数値は未確定)
三宅	大久保遺跡	8世紀前半から始まる新興集落	
橘川	長塚十二山遺跡	竪穴建物79棟・掘立柱建物2棟(7世紀後葉～9世紀中葉) 8世紀代多 数棟の竪穴建物から大量の鉄滓や鑪の羽口 10棟弱の竪穴建物やそのほかの遺構から鉄滓・軽石状遺物 鉄生産関係の比較的大規模な集落製錬炉未検出 周囲の斜面に存在か	

郡	郷	主要遺跡	特記事項	
香取	大槻	吉原遺跡 (多田飛行内遺跡)	掘立柱建物10棟以上 規格配置が不明	
		吉原三王遺跡	竪穴建物92棟 掘立柱建物なし 集落は方形溝に区画され、計画的な配置 古墳時代後期から続く「香取郡大坏郷」などの祭祀的な長文墨書土器	
		織幡妙見堂遺跡	村落寺院 青銅製塔鎧(塔形合子)、奈良三彩の小壺、「佛」・「釋迦」墨書土器 長年大寶2点 土器製作	
		一夜山遺跡	掘立柱建物31棟で比較的多い数量 山幡郷内の可能性もある	
		多田日向遺跡	村落寺院 寺院関係などの墨書土器多数	
		多田寺台遺跡	村落寺院 神仏習合的な墨書土器など墨書土器多数 瓦塔	
	香取	平台遺跡	調査面積少ないが遺構の密度高い	
		長部山遺跡	遺構の密度高い 奈良時代からの新興集落 規格配置をとるか不明	
		伊地山遺跡	掘立柱建物15棟 5間×3間の大型建物 遺構の密度高い 周辺に未知の須恵器窯	
		伊地山藤之台遺跡	遺構の密度高い	
		神田台遺跡	「神宮」墨書土器 遺構の密度はあまり高くない	
		馬場遺跡	「鹿郷長鹿成里成里人□」・「子山口」の墨書土器 遺構の密度はあまり高くない	
	小川	東野遺跡	「埴生」墨書土器 掘立柱建物なし 遺構の密度は高くない	
		玉造上の台遺跡	古墳時代後期～平安時代の大集落 竪穴建物150棟前後(古墳～平安)・掘立柱建物25棟 和同開珎 正式な報告書未刊行 遺構配置不明	
	健田	村田居山遺跡	竪穴建物の分布密度は高いが掘立柱建物少ない	
		小野小仲内遺跡	遺構の分布密度高い 掘立柱建物10棟	
		小野女台遺跡	遺構の分布密度高い	
		小野権現原遺跡	遺構の分布密度高い	
		小野焼山遺跡	遺構の分布密度高い	
		中里西口・台口遺跡	遺構の分布密度高い 小野焼山Ⅱ遺跡と一体の遺跡 古墳～平安時代の集落 掘立柱建物なし	
		中里ノ台遺跡	遺構の分布密度高い 掘立柱建物若干あるが、調査年次古く様相不明瞭	
		青山中峰遺跡	遺構の分布密度高い 掘立柱建物は少ない 「子郷」の墨書土器器杯・へら書き土器器出土	
		青山富ノ木遺跡	遺構の分布密度高い 掘立柱建物12棟、集中 「コ」字形配置にはならない	
		大平遺跡	遺構の分布密度高い 古墳時代後期から続く集落 掘立柱建物なし	
		名木天神山遺跡	遺構の分布密度高い 掘立柱建物の集中箇所あり 規格配置は不明	
		名木不光寺遺跡	古墳～平安時代の集落 掘立柱建物の集中箇所あり 奈良・平安時代の遺構密度は高くない 平安時代の井戸状遺構1基から7体分の馬骨と1体分の牛骨が出土	
		名木鎌部廃寺	基壇建物1棟で一字のみの寺か 三重園文緑単弁八葉蓮華文軒丸瓦は龍正院出土瓦と同范 基壇建物は8世紀後葉～9世紀初 それ以前の掘立柱建物が7世紀末～8世紀初か	
		名木鎌部遺跡	掘立柱建物は少ない 獣脚	
		名木鎌部製鉄遺跡	未調査 名木鎌部廃寺南方300mの斜面に存在	
		磯部	幡谷宮第1遺跡	竪穴建物198棟・掘立柱建物20棟 「磯部麻呂」の墨書土器
			江地山遺跡	竪穴建物多数・掘立柱建物1棟 古墳時代後期から続く集落であるが、奈良時代以降に大きく発展 荒海駅の経営を支える集落の一つ
			飯岡榎入遺跡	比較的遺構の分布密度が高い 調査区内では掘立柱建物少ない
			山谷遺跡	「海上」墨書土器
	大菅向台遺跡		遺構の分布密度高い 掘立柱建物は少ない	
	遠々地・上敷遺跡		遺構の分布密度高い 掘立柱建物はないが、全く存在しないか断定しがたい	
	龍正院廃寺		三重園文緑単弁八葉蓮華文軒丸瓦・宝相華文軒丸瓦・三重弧文軒平瓦を表採 創建は7世紀末～8世紀初	
	龍正院瓦窯		3基 龍正院に瓦を供給 軒丸瓦は龍正院出土のものと同范 軒平瓦は均整唐草文のみで、三重弧文のものは出土していない	
	カネヤキ遺跡		龍正院の梵鐘鑄造遺跡 時期は奈良・平安時代か後世か不明	
	訳草	地蔵原鳳凰遺跡・成井寺ノ下Ⅰ遺跡	7～10世紀の大集落 同一台地の東が地蔵原鳳凰遺跡、西が成井寺ノ下Ⅰ遺跡 尾羽根川と大須賀川の分水界に立地 健田郷または「真敷」郷に属す可能性あり	
		野毛平木戸下遺跡	竪穴建物20棟・掘立柱建物9棟 すべて9世紀代 半地下式の竪形炉や木炭窯	
		野毛平植出遺跡	竪穴建物16棟・掘立柱建物17棟 平安時代主体	
		円妙寺遺跡	9～10世紀代の集落	
		堀之内遺跡	竪穴建物の密度が比較的高いが、掘立柱建物なし 9世紀代の集落 隆平永寶出土	
	山幡	長田舟久保遺跡	竪穴建物2棟・掘立柱建物1棟であるが、鉄生産関係の遺跡 1棟は小鍛冶工場の竪穴建物 もう1棟から三彩(or二彩)の小型壺出土	
		古屋敷遺跡	「山幡」ほか多くの墨書土器 竪穴建物の分布密度が高いが、掘立柱建物は少ない	
		名号戸遺跡	「山幡」の墨書土器 竪穴建物の分布密度が高いが、掘立柱建物は少ない	
	「真敷」	御座ノ内遺跡	「山幡」の墨書土器 竪穴建物の分布密度が高いが、掘立柱建物は少ない	
大久保遺跡		「真敷」の刻書紡錘車 真敷駅に関わるが遺跡自体は健田郷に帰属か		
稲荷山遺跡		土坑墓から北斗七星銀象眼の鉄刀出土 火葬墓からは骨蔵器出土		



第5図 幡谷宮谷第1遺跡遺構位置図・出土墨書土器 (1は『印文セ1996』から、2は『阿部1999』から転載)

もある。

長津台2号遺跡は路線の調査であるため、見つかった掘立柱建物群などが「コ」の字形の建物配置をとるかどうかは判然としないが、たとえ建物群総体の外郭が多少乱れていたとしても、そのあり方から一般的な集落とは考えられない。

また長津台2号遺跡では製鉄炉壁が出土している。周囲には鉄生産遺跡群が多く存在する⁷⁾が、これらが奈良・平安時代のものならば、珠浦郷は鉄生産に関与した郷とみることができる。長津台2号遺跡は通常

の郷家集落に加えて、周囲の鉄生産遺跡群を統括していた遺跡でもある。近隣郷家の郡領氏族である物部近隣氏は郡内にいくつかの鉄生産集団を抱えていた。そのなかでも珠浦郷の集団がもっとも有力である。

長津台2号遺跡の立地をみると、南方直下の低地に栗山川の支流である常磐川の上流部が存在する。とくに掘立柱建物など主要な建物群は台地南端に集中しており、常磐川に近い。常磐川をさかのぼれば、玉作郷など近隣郡内陸部の諸郷に行くことが容易である。また、途中で南下して、千俣郷・近隣郷に至るルートも

あるとみる。重量物の運搬については、たとえ小河川であっても小舟を使用した水上交通が盛んであり、集落と水上交通との関係は印播郡村神郷や船穂郷などでもうかがえる。この鍋木周辺と多古町南玉造周辺との交通関係は古墳の様相からみて前代から存在する（糸川 2021a）。なお長津台2号遺跡は椿海からは台地を隔てた北方の台地上に立地する。椿海の増水時に水害を受けないことが考慮された可能性もあるが、それよりも常磐川による水上交通が重視されたとみる。

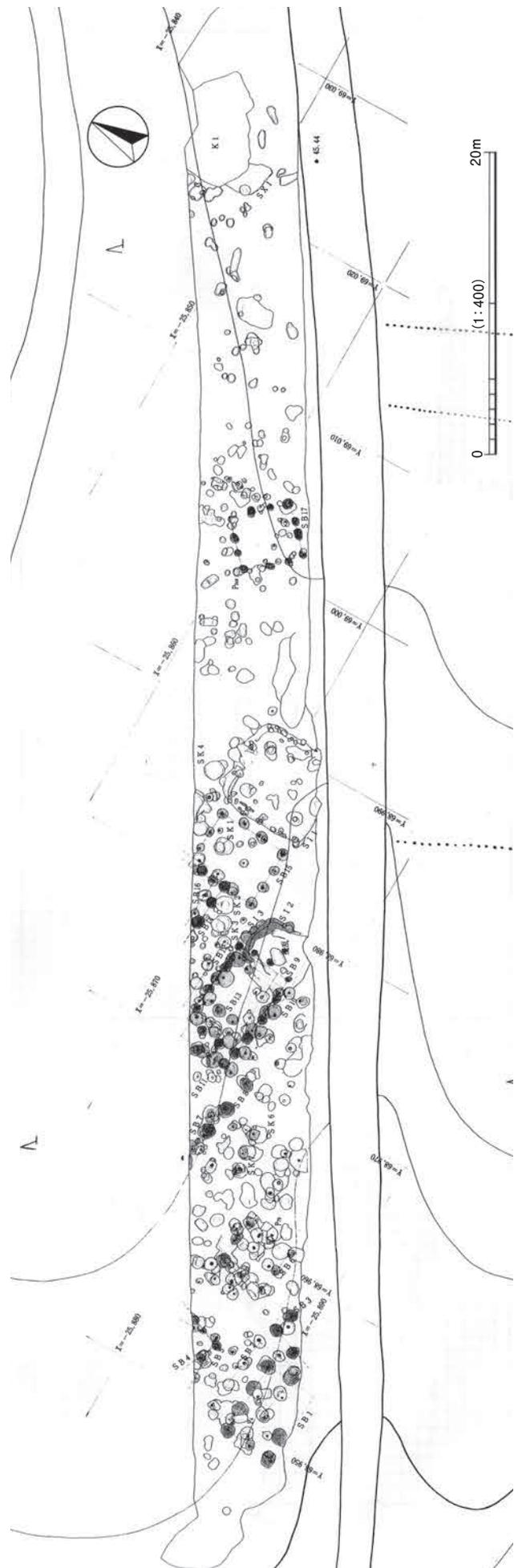
（3）多古台遺跡群No.8地点（第7図）

近隣郡原郷の郷家集落とみる遺跡である。古墳時代から平安時代まで続く大集落である。この遺跡を考察した戸村勝司朗氏によれば、7世紀後・末の竪穴建物は83棟、8世紀代は91棟、9世紀代は97棟である。10世紀代は5棟と激減する。掘立柱建物は9棟検出されている（戸村 2008）。広大な台地の東側に未調査範囲が広く残っているので、遺構の数量がより増えることが確実である。なお報告書から第7図に転載した図面は4世紀～7世紀中葉までの竪穴建物群を含んでいるので、遺構は非常に密集している。しかし7世紀後葉から10世紀代までの遺構位置をみても、北側部分を除いては全体的に分布しており、偏りはない。

掘立柱建物は台地北西部、多古橋川からの支谷が延びる斜面際にやや多く分布している。官衙風建物群とするには棟数が少ないが、若干「コ」の字形の形態を呈しており、原郷の管理施設といえる建物群かもしれない。遺構が著しく重複しているため、掘立柱建物はより多かった可能性が高い。むしろ9棟も発見したのは調査担当者の発掘技術の高さと努力によるものと評価できる。報告書からは掘立柱建物の間数が不明瞭であるが、桁行6間×梁行2間程度の長い建物が存在する。大型の建物も2棟は存在し、また総柱建物も存在するとみられる。見つかった掘立柱建物だけでも一般の集落を越える内容がある。官衙風建物群の存否を保留するにしても、原郷の中心集落とみて間違いのない遺跡である。これは多古橋川を西南方眼下に、栗山川を東方に臨むことと、台地が広大であるという立地の良さに起因するものである。多古台遺跡群No.8地点は古墳時代から平安時代まで続く要衝に立地した。出土遺物のなかにはクルル鉤があり、収納物を施錠・管理する掘立柱建物が存在することを示す。

（4）芝崎遺跡・中島遺跡（第8図）

芝崎遺跡は近隣郡石室郷の郷家集落の可能性のある遺跡である。砂堤帯に立地し、奈良・平安時代の畑・



第6図 長津台2号遺跡遺構位置図（『戸村2001』から転載）

竪穴建物・掘立柱建物が多く見つかった大規模な集落遺跡である。遺構の重複が激しく、一時期の様相が不明瞭であるが、掘立柱建物は比較的整然とした配置である。報告書の5期から7期までの遺構位置図を第8図として転載した。両遺跡を考察した道澤明氏によれば、5期は9世紀前半、6期は9世紀後半、7期は10世紀前半である（道澤 2006）。芝崎遺跡の整然とした配置の掘立柱建物群は9世紀前半代からとなる。しかし個々の掘立柱建物の年代を絞ることは難しい場合が多く、報告書で8世紀後半とされた3・4期にも掘立柱建物が分布するので、整然とした配置のものも一部は8世紀代にさかのぼるのではないだろうか。

芝崎遺跡に近い中島遺跡でも「コ」の字形の整った配置をもつ掘立柱建物群が見つかった（第8図）。芝崎遺跡と同様に石室郷の中心集落の一つである。掘立柱建物群の時期が9世紀後半から10世紀前半代と想定されている（道澤 2006）ことから、芝崎遺跡から引き継がれた郷家の建物群の可能性がある。あるいは郷家の建物群ではなく、初期荘園の庄所や富豪の居宅かもしれない。またこの時期の郷家の建物群は、その性格が実質的に富豪の居宅に変質している可能性もある。低地の遺跡であるため、井戸が検出され、井戸枠の残りがよい。出土した墨書土器のなかに「畔代」・「足代」・「片野」があるが、これらは上総国武射郡の郷名である。武射郡とのかかわりが深い遺跡である。

芝崎遺跡の掘立柱建物群が9世紀代主体であるとすると、郷の成立が遅れた可能性があるが、断定しがたい。また石室郷の場合、郷域内に台地上の集落も存在したとみるので、台地上に郷の管理施設をもつ集落が



第7図 多古台遺跡群No.8 地点遺構位置図（『戸村2008』から転載）

存在する可能性もある。しかし、そのような集落が存在しなければ、芝崎遺跡・中島遺跡は石室郷の郷家集落として最有力である。

近瑛郡須加郷に所属する平木遺跡では、武射郡巨備郷とみられる「子備」の墨書土器が出土した。平木遺跡と巨備郷との交通関係において、芝崎遺跡・中島遺跡はその途上にある。中島遺跡からもうかがえる武射

郡と逆瑛郡の海浜砂堤帯諸郷との頻繁な交通関係のなかで、石室郷の郷家集落が砂堤帯に存在しても不思議ではない。

芝崎遺跡群は郷家集落の候補遺跡というだけではなく、逆瑛郡において海浜砂堤帯の開発が活発であったことを示す遺跡群でもある。その様相は、海浜砂堤帯を郷域とする逆瑛郡諸郷における主要集落のあり方を示唆する。

(5) 大塚遺跡群 俣田遺跡

(第9図)

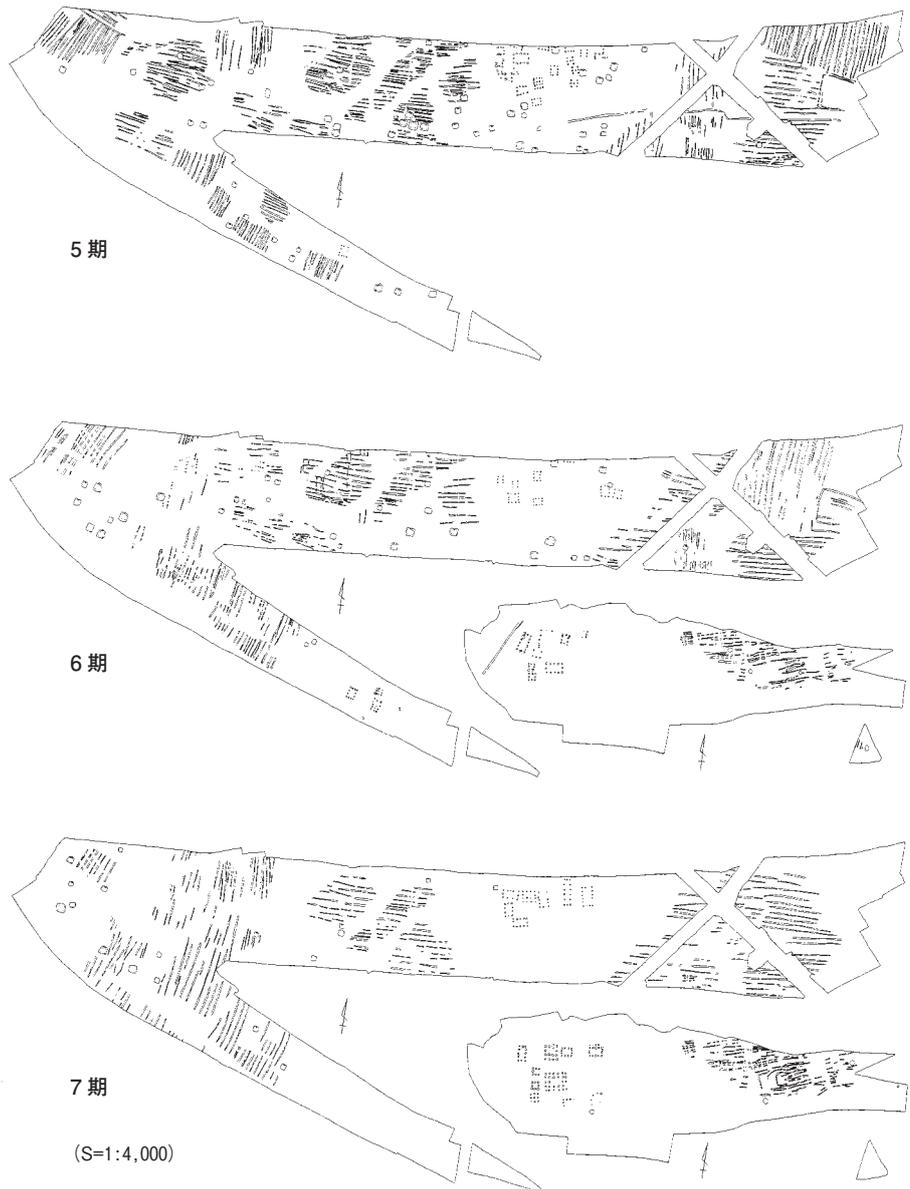
「逆厨」・「庄」墨書土器が出土した遺跡である。「逆厨」から逆瑛郡内の遺跡であることがわかる。栗田則久氏は茨城郷内の遺跡と比定しているが、遺跡の位置からみて妥当である。また栗田氏は「庄」墨書と遺跡の内容から庄家(荘家)の可能性があると考察している(栗田2014a)。

俣田遺跡の調査は6地点が実施され、調査範囲は台地の一部である(越川1993・越川1998)。なお東方の条山遺跡(越川1993)が俣田遺跡と台地上で続く部分があることから、条

山遺跡も一連の遺跡としてあわせてみていく。奈良・平安時代の竪穴建物は50棟、掘立柱建物は30棟が見つかった。古墳時代後期の竪穴建物が25棟あり、調査地周辺に古墳時代後期～平安時代の集落が広く展開する。

俣田遺跡第2地点では掘立柱建物が集中し、そのなかには床束をもつ建物や総柱建物が複数棟存在する。建物群は台地の南寄りに位置する。南方の支谷に小河川があれば、それは東方の多古橋川に通じていた可能性がある。立地は飯積原山遺跡や、掘立柱建物群が集中して見つかった他遺跡のあり方と共通する。

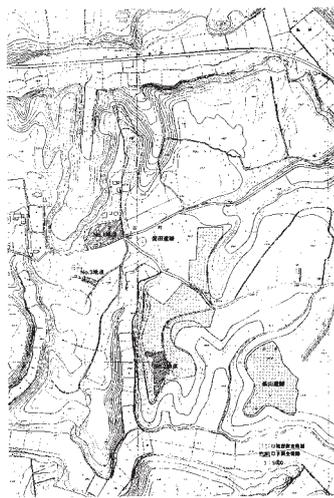
「庄」墨書の土師器杯は掘立柱建物群から離れた第1地点にある竪穴建物SI4から出土した。底部の内外面に2か所記入されている。出入り口ピット上から出土しており、竪穴建物廃棄の祭祀にかかわる特別な土



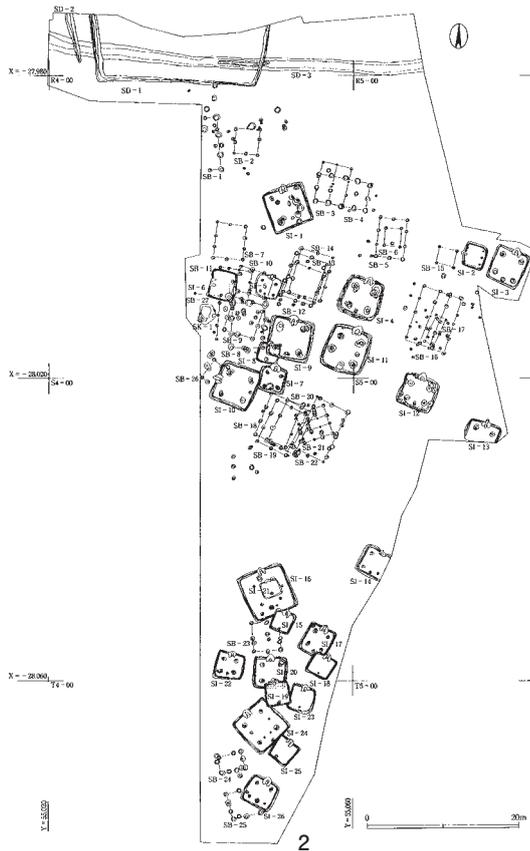
第8図 芝崎遺跡・中島遺跡遺構位置図・変遷図(『道澤ほか2006』から改図転載)

器である。栗田氏は9世紀前葉の土器としているが、伴出土器は8世紀末主体である。この杯は口縁がやや外反する点で9世紀的であるが、底径が大きいことから歴年代は8世紀末の可能性もある。「逆厨」の墨書をもつ土師器杯は掘立柱建物が集中する第2地点の竪穴建物から出土した。9世紀前葉の土器である。

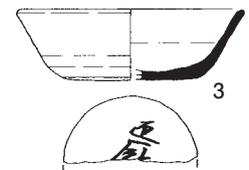
下総において「庄」墨書土器を出土した遺跡はいくつかあり、この点についても栗田氏が考察している(栗田ほか2010)。また本例を含めその後の出土例も増加している⁸⁾。そのなかでも酒々井町飯積原山遺跡は、木原高弘氏によって総合的に考察され、初期荘園遺跡であることが明らかにされた遺跡である(木原ほか2015・木原2016)。俣田遺跡の様相を飯積原山遺跡と比べると、「庄」の墨書や掘立柱建物の数量が多



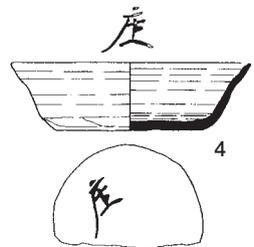
1 俣田遺跡周辺地形図
(S=1:20,000)



2 第2地点遺構位置図
(S=1:1,000)



3 「逆厨」墨書土器



4 「庄」墨書土器
3・4 (S=1:4)

第9図 大塚遺跡群俣田遺跡周辺地形図・第2地点遺構位置図・墨書土器 (越川 1993から転載)

いこと、歴年代が同時期である点で共通性がある。また「逆厨」は飯積原山遺跡の「三倉」からうかがえる建物群の一つに相当する可能性がある。しかし調査面積の制約もあり、建物群については飯積原山遺跡ほどには整然としていない。この点で明瞭な庄所とみるにはやや弱い。

なお庄は本来律令制に内在するものであり、そのまま荘園をあらわすものではないことが指摘されている(小口・吉田 1991)。下総において「庄」墨書の存在は初期荘園の可能性が高いことを示すのかもしれないが、それを認定するには当該遺跡の遺構の様相をみる必要があり、さらに周辺遺跡の様相や真の開発主体者の存在を考慮しなければならない。

俣田遺跡が初期荘園である可能性はあるが、本稿ではなお仮定段階として⁹⁾、開発主体者について以下に仮説を述べる。「庄」墨書とともに出土した「逆厨」の「逆」は逆瑳郡を示すものである。「郡厨」墨書土器が出土した匝瑳市平木遺跡は、道路状遺構や多量の墨書土器等の様相から、逆瑳郡の郡領層が関与した遺跡と考察されている(田形 1997)。「逆厨」の「逆」は単に逆瑳郡内の遺跡というだけで、必ずしも逆瑳郡の郡領層とは結び付かないかもしれない。しかし平木

遺跡との類似性や荘園経営には開発主体者が必要であることを考慮すると、その主体者は逆瑳郡の郡領層の可能性もある。また茨城郷の郷長層も郡領の意向を受け、実質的にかかわった可能性がある。さらに郡領層の上位に中央の有力寺社や有力貴族あるいは下総国分寺が存在するのかもしれないが、不明である。

逆瑳郡の郡領である物部逆瑳氏は、物部逆瑳連熊猪が承和二年(835)に本貫を逆瑳郡から左京二条に移し、中央官人化している。ここに至ると逆瑳郡の大領と物部逆瑳氏(逆瑳宿禰氏)の首領の人物が、同族であったとしても明らかに異なることになる。物部逆瑳氏が実力を蓄積したひとつの要因として俣田遺跡のような集落の存在があるのかもしれない。しかし俣田遺跡が荘園としてその後の歴史に伝えられることはなかったので、実際に物部逆瑳氏と関係するのか、関係するとしても、衰退したのか、発展的に解消したのかも不明である。

なお俣田遺跡の性格の想定については、「庄」墨書土器という遺物の存在をひとつの大きな拠り所としている。逆にいえば「庄」墨書土器の出土がなければ、茨城郷の有力集落というだけで、庄家の可能性のある遺跡とまで言及することは難しい。それに対して本項

(1)～(4)までの遺跡は、「磯部麻呂」墨書土器などの重要な遺物が出土してはいるが、遺構のあり方だけで遺跡の性格を認定している点で仮田遺跡とは異なる。遺跡の性格の想定について遺物に大きく依存している仮田遺跡は、集落遺跡研究の難しさを示す遺跡である。

(6) そのほかの郷家集落候補遺跡・郡家関連遺跡

・海上郡大倉郷または香取郡山幡郷

境原遺跡は堅穴建物383棟(古墳～平安)・掘立柱建物が66棟と多くの遺構が見つかった。ほかに規格的な配置の建物群をもつ遺跡が存在しなければ、郷家集落の有力な候補遺跡である。掘立柱建物は集中箇所があるようにも見えるが、規格配置の建物群については不明瞭である。遺構数は未調査範囲があるため、さらに増えることが確実である。境原遺跡は海上郡大倉郷の郷家集落の可能性があるが、大倉郷に帰属する以前は香取郡山幡郷の範囲内に所在するとみられ、山幡郷の郷家集落であった可能性もある。大倉郷・山幡郷は郡郷の再編が行われたため、郷家集落の抽出が難しい。なお正式な報告書が刊行されていないため、詳細な様相が不明瞭である。

栗田則久氏は山幡郷の遺跡群を考察し、山幡郷のような伝統的な地域の集落は掘立柱建物の比率が少ないことを指摘した(栗田 2014b)。たしかに古墳時代後期から続く伝統的な集落では、その傾向がうかがえる。

しかし幡谷宮谷第1遺跡や長津台2号遺跡などの様相から、東総においても郷家集落はかなりの数の掘立柱建物をもつとみる。ただし現状では、東総におけるすべての郷家集落が規格的配置の建物群をもつかどうかは保留する。

・逆瑳郡逆瑳郷

平台遺跡は堅穴建物・掘立柱建物が多く見つかった。出土遺物に須恵器円面硯がある。生尾遺跡の近隣に所在する遺跡であり、郡家関連遺跡である。また生尾遺跡の近隣ではないが、飯倉鈴歌遺跡では6間×4間・5間×4間の大規模な掘立柱建物が見つかり、堅穴建物からは三彩陶器小壺が出土した。遺構・遺物ともに郡家所在郷にふさわしい遺跡である。逆瑳郷の郷家集落は前項で述べたとおり、生尾遺跡・老尾神社が所在する広大な台地の一角に存在するとみる。あるいは平台遺跡や匠瑳城跡など、支谷を隔てた周囲の台地上に存在するのかもしれない。様相は不明瞭であるが、位置については特定のである。

・逆瑳郡田部郷

二階遺跡は奈良・平安時代の堅穴建物・掘立柱建物が多く見つかった。掘立柱建物群の年代について、鬼澤昭夫氏は掘立柱建物群の主体となる歴年代を8世紀前葉から中葉とし、主軸方向から概ね2時期に区分している(鬼澤 1994)。田部郷の郷家集落候補遺跡である。根崎遺跡も飛鳥時代～平安時代の堅穴建物が32棟、掘立柱建物が21棟見つかった。栗山川本流を東に臨む広大な台地上に立地する。正式な報告書が刊行されていないため不明瞭であるが、遺構数がより多く存在し、特に掘立柱建物の増加が見込めるならば、こちらも田部郷の郷家集落候補遺跡といえる。

・逆瑳郡茨城郷

大原遺跡は掘立柱建物が多く見つかったが、整然とした配置とまではいえない。しかし、その多さから茨城郷における有数の集落の一つである。なお大原遺跡が所在する多古町喜田には「大海道」という小字がある(多古町 1985)。もしもこの地名が奈良・平安時代由来のものならば、考古学的成果と合わせて印播郡家から逆瑳郡家に至る伝路は喜多周辺を通過する可能性がある。しかし地名の発祥が必ずしも奈良・平安時代と断定できず、今後の課題である。

・逆瑳郡中村郷

信濃台遺跡では飛鳥時代から平安時代の堅穴建物が多く見つかった。出土遺物のなかに「(下)総國逆瑳郡(玉作)郷」などの墨書土器がある。位置的には玉作郷ではなく、中村郷内の遺跡である。報告書が刊行されていないため不明瞭であるが、中村郷の郷家集落の可能性はある。中内原遺跡は大型の掘立柱建物が見つかった。中村郷における主要集落の一つである。

・海上郡布万郷

中仁良I遺跡では4棟の掘立柱建物が見つかったが、そのうちの2棟は長軸方向がほぼそろっており、左右対称に位置する。また掘りかたは径が1m以上であり、方形の形態をもつものもある。調査区外の様相次第では布万郷の郷家集落となる可能性がある。なお布万の遺称である府馬からは比較的遠い位置に所在する。

・香取郡小川郷

玉造上の台遺跡は古墳時代後期から平安時代にかけての大集落である(原田 1983)。報告書が刊行されていないため様相が不明瞭であるが、小川郷の郷家集落の可能性はある。

(7) そのほかの主要遺跡

・逆瑳郡千俣郷

八日市場大寺廃寺は通瑛郡における有力な初期寺院の一つであり、古代末まで存続したことが想定されている。山路直充氏は龍角寺式の三重圈文縁単弁八葉蓮華文の軒丸瓦などから創建年代を7世紀末と考察している。また常陸国分寺式の素文縁単弁十六葉蓮華文軒丸瓦は香取市(旧小見川町)木内廃寺・茨城県稲敷市(旧江戸崎町)下君山廃寺と同様の文様をもつもので、8世紀後半としている。見つかった基壇建物1棟は10世紀代のものである(山路 1998・2012)。

飯塚遺跡群柳台遺跡では200棟前後の竪穴建物が見つかった。掘立柱建物の報告はないが、調査年次が古いので若干存在する可能性があるとする。しかし古墳時代後期から続く伝統的な集落であり、掘立柱建物の数量は少ないと想定する。「千俣仏カ」とみられる墨書土器が出土しているが、この「千俣」について栗田則久氏は千俣郷を表すと考察している(栗田 1994)。また軍団にかかわる「千校尉」墨書土器が出土しており、千俣団の存在が想定されている(高木・桜井 1980、川尻 2012)。なおこの土器には「千校尉」を切つて4条×3条の九字切りの線刻がある¹⁰⁾が、報告されていない。千俣郷・千俣団の解釈はどちらもあり得るが、筆者はなお完全には断定しがたいと考える(糸川 2021 a)。

・通瑛郡須加郷

須加郷は主として第二砂堤帯上に位置する郷である。先述した平木遺跡はその砂堤帯上に立地し、須加郷の遺称地に比較的近いことから、須加郷内に所在する遺跡とみる。平木遺跡では砂堤帯上を通る道路や若干の竪穴建物・小規模な「コ」の字形配置の掘立柱建物群・井戸が検出された。道路は伝路であり、遺構群は通瑛郡にかかわる施設である。また多量の墨書土器が出土したが、そのなかに通瑛郡の交通や施設にかかわる資料がある¹¹⁾。そのほかチョウセンハマグリなどの貝が出土した。貝の出土は平木遺跡が九十九里海岸に近いことから当然のことであるが、主要な交通路の存在から、それにかかわる馬の存在や馬の飼養にともなう塩の調達なども考えられる。馬の飼養については栗原郷など通瑛郡内陸部の諸郷で盛んであった可能性があるが、飼育には大量の塩が必要であり、また塩の運搬には馬が必要である¹²⁾。通瑛郡海浜部の諸郷における塩生産や海産物の獲得などの漁撈活動は不明瞭であるが、今後留意する必要がある。

・通瑛郡日部郷

桜井平遺跡は見つかった竪穴建物が少ないが、古墳

の周溝から「総国」・「郡カ軽部」の墨書土器が出土した。海上郡軽部郷を表した文字であるが、日部郷内の遺跡である。

・通瑛郡田部郷

二階遺跡に比較的近いコジヤ遺跡では軒丸瓦と平瓦が出土した。軒丸瓦は山田寺系の瓦当文であるが小振りであり、時期的には初期寺院よりも下るものである。近隣の岩部遺跡でも丸瓦が出土しており、田部郷においても古代寺院が存在した。なお田部郷は鉄生産が行われた遺跡が多い。

・通瑛郡茨城郷

林遺跡は掘立柱建物が比較的多い。吹入台遺跡は掘立柱建物がまとまって検出され、やや規格的な配置であるが、官衙風建物群とまでいえるか断定しがたい。林小原子台遺跡群は骨蔵器や方形区画墓が見つかり、奈良時代から平安時代初頭の墓制を考えるうえでも重要な遺跡群である。火葬墓群は大塚台遺跡でも見つかっている。また大塚台遺跡では奈良三彩陶器火舎が2個体、「馬開寺」・「升杯」等の墨書土器が出土した。村落寺院関係の小規模集落であるが、奈良三彩という希少な遺物の出土などは、私度僧の活動(萩原ほか2021)とともに印播郡から通瑛郡に至る交通関係を背景にしているとみる。三彩陶器は仏具であり、村落寺院名の墨書・火葬墓群とあわせて、いずれも私度僧の活動にかかわる遺物・遺構である。

・海上郡城上郷(城内郷)

木内廃寺の創建については、龍角寺式の素弁八葉蓮華文軒丸瓦の年代から山路直充氏によって7世紀末～8世紀初めとされている。山路氏はその立地から海上郡の郡領が檀越であったことを想定する一方、香取郡との境に近いことから、数郡一寺の性格も帯びると指摘している。また瓦は八日市場大寺廃寺の影響を受けていることから、通瑛郡とのかかわりや、さらに下総国分寺とのかかわりも指摘し、複合的な性格を考察している(山路 1998・2012)。木内廃寺の近くに位置する清水入瓦窯は木内廃寺に瓦を供給した瓦窯である。

・海上郡編玉郷

駒込Ⅱ遺跡¹³⁾は古墳時代後期を含むが、およそ170～180棟の竪穴建物が見つかった。一部が確認調査であるので棟数は概数である。本調査分の飛鳥～平安時代の棟数は76棟である。これまでの調査成果から残り約100棟のうち、半数程度が奈良・平安時代のものとみられる。掘立柱建物の棟数は6棟であり、現状ではその割合は少ない。調査地は台地先端部で、東方に未

調査範囲が広がる。また既調査区においても攪乱を受けた部分の面積がかなりある。そのため堅穴建物等の遺構数は大幅に増加することが確実である。

・香取郡大槻郷

織幡妙見堂遺跡は村落寺院が見つかり、仏教的な遺物や皇朝十二銭が出土した。これら希少な遺物は香取神宮に至る交通路のなかでもたらされたものである。また土器製作も行われている。吉原山王遺跡の集落は方形溝によって区画されており、香取神宮の神戸の集落として、きわめて計画的な様相がうかがえる。墨書土器のなかに「香取郡大槻郷」があることから、大槻郷に所属することが判明した。

・香取郡香取郷

遺構分布密度が高い遺跡としては、平台遺跡・長部山遺跡・伊地山遺跡・伊地山藤之台遺跡・藤之台2遺跡がある。しかしいずれの遺跡も建物群が規格的な配置をもつか不明である。神田台遺跡では「神宮」の墨書土器が出土し、香取神宮との関係がうかがえる。東野遺跡では「殖生」の墨書土器が出土した。香取郷と殖生郡との交流関係を示すものである。神田台・東野遺跡及び前稿1(1)Bで述べた「鹿郷長…」墨書出土の馬場遺跡はいずれも遺構の分布密度は高くない。

・香取郡健田郷

第1表に示したように遺構の分布密度が高い遺跡が多いが、概して掘立柱建物が少ない。また路線の調査が多いためその点を考慮する必要があるが、現状では明瞭な規格配置の建物群をもつ遺跡も見当たらない。青山富ノ木遺跡は掘立柱建物の集中箇所がある。東西南北に近い方向をとるものが多い点でやや官衙風であるが、「コ」の字形の配置にはならない。なお江尻和正氏は成田市(旧下総町)小野地区周辺の遺跡群について健田郷に属することを指摘しており(江尻・石井1990)、筆者もその見解にしたがう。

名木不光寺遺跡では、平安時代前半とみられる1基の井戸状遺構から7体分の馬骨と1体分の牛骨が出土した。馬骨は高齢馬主体である。萩原恭一氏は不光寺遺跡においては多くの若齢馬も飼育されており、馬の飼育が大規模かつ活発であると考察している(萩原1993)。萩原氏が指摘するとおり、不光寺遺跡は香取郡における私牧のあり方を考える上で重要な遺跡である。

名木鎌部廃寺の創建について、山路直充氏は龍角寺式の単弁八葉蓮華文軒丸瓦の年代から7世紀末～8世紀初としている。ただし創建段階の建物について、山路氏は掘立柱建物と想定している。その後建てられ

た基壇建物は宝相華文軒丸瓦の年代から、下総国分寺の創建段階である8世紀第3四半期のものである。瓦の大部分は龍正院瓦窯の製品の可能性が高い(山路2012)。なお名木鎌部廃寺の南方300mの斜面に名木鎌部製鉄遺跡が存在する(沼澤1998)。

・香取郡磯部郷

幡谷宮谷第1遺跡を除いては概して掘立柱建物が少ない。江地山遺跡では多くの堅穴建物が検出された。古墳時代後期から続く集落であるが、奈良時代以降に大きく発展した。掘立柱建物は1棟のみであり、きわめて少ない。荒海駅の遺称地に近く、荒海駅の経営を支える集落の一つである。なお江地山遺跡は9世紀中葉頃に消滅しており、延暦二十四年(805)の荒海駅廃止と連動する可能性が指摘されている(寺村1994)。山谷遺跡では「海上」の墨書土器が出土した。山谷遺跡は香取郡の遺跡であるが、「海上」は海上郡を表したものである。

龍正院廃寺は香取郡西部の中核寺院である。その創建について、山路直充氏は龍角寺式の単弁八葉軒丸瓦の年代から7世紀末～8世紀初としている(山路2012)。軒丸瓦は名木鎌部廃寺、均整唐草文軒平瓦は木内廃寺と同范であり、郡内の他寺院との関係がうかがえる。さらに宝相華文軒丸瓦は下総国分寺と同文であり、須田勉氏は国分寺の造瓦に龍正院の瓦工が派遣されたと考察している(須田1998)。隣接する龍正院瓦窯は龍正院廃寺に瓦を供給した瓦窯であるが、それにとどまらず名木鎌部廃寺にも供給している(山路2012)。

・香取郡訳草郷

野毛平・長田地区には多数の奈良・平安時代遺跡が存在する。ただし堅穴建物が50棟以上の大集落は確認されていないことと、8世紀代の遺構が少ないことが小牧美知枝氏によって指摘されている(小牧2010)。野毛平木戸下遺跡で見つかった堅穴建物・掘立柱建物について、小牧氏はすべて9世紀代としている。喜多圭介氏は大型の堅穴建物の存在と海獣葡萄鏡が出土したことから、郷長クラスの居住を想定している(喜多1990)。その考察を全面的に否定はしないが、8世紀代の遺構が存在する遺跡を検討したうえで決める必要がある。また斜面地からは半地下式の塹形炉や木炭窯が検出され、鉄生産関連の工人集落でもある。訳草郷の場合、どこかに8世紀代の遺構をもつ遺跡が存在するとみるが、あるいは郷の成立が新しいのかもしれない。

・香取郡山幡郷

「山幡」の墨書土器が出土した古屋敷遺跡・名号戸遺跡・御座ノ内遺跡は近接して位置する。いずれも堅穴建物の分布密度が高いが、掘立柱建物は少ない。地々免遺跡は境原遺跡とは支谷をはさんで対向する台地に立地する。

・香取郡「真敷郷」

成田市（旧大栄町）稲荷山に所在する大久保遺跡から「真敷」の刻書紡輪が出土した。これについては別稿で述べた（糸川 2021a）。大久保遺跡に近い稲荷山遺跡では、刀身に北斗七星の銀象嵌が施された鉄刀が土坑墓から出土した。刀には双脚山形足金物や小孔を多数穿つ複雑な形状をもつ鏢、また方頭の柄頭または鞘尻が付属する。類例がきわめて少ない遺物である。この七星剣を考察した日高慎氏は、その特徴から歴年代が7世紀後葉から9世紀中葉までの長期にわたり、限定は難しいとしている（日高・吉澤ほか 2004）。また骨蔵器をもつ火葬墓も検出されており、吉澤悟氏は土器の特徴から8世紀後葉から9世紀前葉頃のものとしている。大久保遺跡・稲荷山遺跡ともその位置から健田郷に所属する可能性もあるが、真敷駅の遺称地にも近く、出土遺物の様相から、8世紀代においては真敷駅とのかかわりが深いと考える。七星剣のような希少な遺物は、古東海道駅路の交通および真敷駅とのかかわりによってもたらされたものである。

おわりに

本稿では、前稿で述べた郡郷の比定および各郷内に所属する遺跡の把握をもとに、東総各郷の主要集落・庄家遺跡等について述べた。筆者は郷内全体の管理施設をもつ集落を郷家集落と呼んでいる。東総において筆者が確実な郷家集落とみるのは、香取郡磯部郷の幡谷宮谷第1遺跡、匝瑳郡珠浦郷の長津台2号遺跡、匝瑳郡原郷の多古台遺跡群No.8地点の3遺跡である。匝瑳郡石室郷の芝崎遺跡については若干の懸念材料があるので断定を保留するが、それが払拭されれば郷家集落とみてよい遺跡である。ただし芝崎遺跡に後続する中島遺跡の建物群の経営者については、石室郷の郷長層にとどまらず、匝瑳郡における富豪層の性格をあわせもった、あるいは富豪層に変貌したとみた方がよいかもしれない。また匝瑳郡茨城郷に所在する俣田遺跡は庄家の可能性のある遺跡である。

そのほか、3（6）・（7）でみた遺跡のなかにも郷家集落や庄家遺跡が含まれているとみるが、東総にお

いては正式な報告書が刊行されていない場合も多く、全体の様相・変遷を把握しがたいのが実状である。なお長津台2号遺跡について筆者は珠浦郷の郷家集落とみるが、珠浦郷自体の比定地が確定していないため問題をかかえている。

東総の場合、未了の報告とともに広域で大規模な調査が少ないことから、郷内で調査・報告された遺跡が多い印播郡村神郷や船穂郷などと比べると研究の到達度に差がある。芝崎遺跡群のように一部で深く考察されている遺跡もある（道澤 2006ほか）が、郷の比定地・主要遺跡について歴史的価値の共有化を図る必要がある。

今後、奈良・平安時代における東総の集落研究がいつそう進展することを期待する。本稿がそのためのたたき台のひとつになれば幸いである。

謝辞

本稿の執筆にさいしては以下の諸氏にご教示をいただきました。ご芳名を記して感謝申し上げます。

赤塚弘美 荒井世志紀 井手稜 小笠原敦子 鬼澤昭夫
菊池敏記 栗田則久 小林信一 小林昂弘 篠塚栄子
戸村勝司朗 萩原恭一 平野雅一 道澤明 山口典子（敬称略）

注

- 3) 8世紀中頃から10世紀前半代くらいまでの荘園は初期荘園または古代前期荘園とよばれているが、この時期に出土する墨書土器の大部分が「庄」であることから、井上尚明氏は庄家という用語を使用して考察している（井上2014）。本稿では井上氏の考察にしたがい、初期荘園（古代前期荘園）遺跡について、考古学の立場から庄家遺跡とする。なお庄（荘）所は庄家の建物群であるが、それだけでなく「開発・耕営・収取に実務機能を発揮すべき経営拠点」としての性格が位置づけられている（藤井 1986）。
- 4) 本稿第1表作成の過程で別稿（糸川 2020）の誤りを見つけたため、ここで訂正する。
別稿第1表 駒込Ⅱ遺跡の旧所属市町 佐原市（誤）→小見川町（正）
- 5) 筆者は以前、交通というテーマで東総三郡の様相を論じたことがある（糸川 2021a）が、このときには寺・瓦からの視点が欠けていた。山路氏が考察した海域と寺というみかたを加える必要がある。
- 6) 幡谷宮谷第1遺跡は正式な報告書が刊行されていないため、全体の様相が不明瞭である。整理作業の実施は難しいと思われるが、大きい遺構配置図の公表を望む。そのような図面を検討すれば、奈良・平安時代の堅穴建物群と掘立柱建物群の設計上の関連性を指摘できる可能性がある。大きい遺構配置図の公表という点については、玉造上の台遺跡・二階遺跡・根崎遺跡・信濃台遺跡など報告書が刊行されていないほかの遺跡も同様である。なお清水堆遺跡は上記の主要遺跡以上に海上郡家関連遺跡として重視される必要がある

あり、学術発掘が実施されることが望ましい。

- 7) 匝瑳郡において鉄生産が行われた遺跡は珠浦郷以外では田部郷に多く、日部郷にもみられる。また海上郡や香取郡にも存在する。これらの鉄生産遺跡の様相については看過しえないものがあるが、紙幅の都合上、別稿で記述したい。
- 8) 2020年度の(公財)千葉県教育振興財団の流山市前平井遺跡の調査において「庄」墨書土器が出土した。なお見つかった掘立柱建物の掘りかたは規模が大きく方形であり、官衙風である。小林昂弘氏・栗田則久氏のご教示による。
- 9) この点に関して、栗田則久氏から「庄」墨書土器が出土してもただちに初期荘園とするのではなく、認定するには総合的に検討すべきであるとのことのご教示をいただいた。
- 10) 九字切りの存在については、平野雅一氏・萩原恭一氏からご教示をいただいた。
- 11) 平木遺跡については、報告者である小久貫隆史氏の文献(小久貫 1988・1998)のほか、その歴史的意義について言及したいくつかの論考がある(田形 1997・平川 2001・天野 2001)。なかでも田形孝一は平木遺跡の道路遺構について伝路であることをすでに指摘している。本稿の記述は田形の論考を始め、斯学の考察を参考とした。なお平木遺跡をめぐる交通関係については、筆者も別稿で述べた(糸川 2021a)。
- 12) 古代甲斐国における塩生産等を考察した平野修氏は、山梨市中島遺跡から製塩土器や「馬」の刻書土器が出土していることを指摘した。平野氏は「馬にかかわるような祭祀や儀礼行為等のさいに当該塩が使用された」と考察している(平野 2020)。
- 13) 駒込Ⅱ遺跡の様相については、荒井世志紀氏からご教示をいただいた。

引用・参考文献

- 阿部寿彦 1999「幡谷宮谷第1遺跡－古東海道荒海駅とともに栄えたムラ－」『(財)印旛郡市文化センター 第3回遺跡発表会要旨』(財)印旛郡市文化センター
- 天野 努 2001「食の生活」『千葉県の歴史 通史編 古代2』千葉県
- 糸川道行 2020「奈良・平安時代における東総の集落と郡郷」『研究連絡誌』第83号(公財)千葉県教育振興財団
- 糸川道行 2021a「奈良・平安時代における東総の交通」『古代』第168号 早稲田大学考古学会
- 糸川道行 2021b「東総の主要集落・郡家と郡郷(上)」『研究連絡誌』第85号(公財)千葉県教育振興財団
- 井上尚明 2014「多様な「地方官衙と庄家・居宅」『古代官衙』ニューサイエンス社
- 印旛郡市文化財センター 1996『平成6年度 財団法人印旛郡市文化財センター年報11』
- 江尻和正・石井明憲 1990『小野女台遺跡』(財)香取郡市文化財センター
- 小口雅史・吉田孝 1991「律令国家と荘園」『講座日本荘園史 2 荘園の成立と領有』吉川弘文館
- 小久貫隆史 1988『八日市場市平木遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 小久貫隆史 1998「平木遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3

- (奈良・平安時代)』千葉県
- 鬼澤昭夫 1994「二階遺跡」『事業報告Ⅲ－平成4年度－』(財)香取郡市文化財センター
- 川尻秋生 2012「用語の解説 戸籍にみえる用語」『市川市史編さん事業調査報告書 下総国戸籍 釈文編・解説編』市川市文化国際部文化振興課
- 喜多圭介 1990『野毛平木戸下遺跡・野毛平向山遺跡・野毛平植出遺跡・野毛平千田ヶ入遺跡・長田舟久保遺跡・長田土上台遺跡』(財)印旛郡市文化財センター
- 木原高弘ほか 2015『酒々井町飯積上台遺跡2・飯積原山遺跡3・柳沢牧墨木戸境野馬土手－酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書4』(公財)千葉県教育振興財団
- 木原高弘 2016「酒々井町飯積原山遺跡における初期荘園について」『研究連絡誌』第77号(公財)千葉県教育振興財団
- 栗田則久 1994「移動する墨書土器「千俣」(天野努・栗田則久・田形孝一 1994「出土文字資料と地名」中のⅡ『千葉県史研究』第2号 千葉県)
- 栗田則久ほか 2010『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書－流山市思井堀ノ内遺跡－』(財)千葉県教育振興財団
- 栗田則久 2014a「匝瑳郡の遺跡－飯塚遺跡群柳台遺跡を中心に－」『市川市史編さん事業調査報告書 下総国戸籍 遺跡編』市川市文化国際部文化振興課
- 栗田則久 2014b「香取地域の遺跡－小見川地域を中心に－」『市川市史編さん事業調査報告書 下総国戸籍 遺跡編』市川市文化国際部文化振興課
- 黒沢哲郎 1995「信濃台遺跡」『事業報告Ⅳ－平成5年度－』(財)香取郡市文化財センター
- 越川敏夫 1993『大塚遺跡群俣田遺跡』(財)香取郡市文化財センター
- 越川敏夫 1998『大塚遺跡群俣田遺跡Ⅱ』(財)香取郡市文化財センター
- 小牧美知枝 2010『野毛平東方遺跡・野毛平上之内遺跡・野毛平植泉台Ⅰ遺跡・野毛平泉台Ⅱ遺跡』(財)印旛郡市文化財センター
- 菅原祥夫 1998「陸奥国南部における富豪層居宅の倉庫群－福島県郡山市正直C遺跡・東山田遺跡の分析事例を中心として－」『古代の稲倉と村落・郷里の支配』奈良国立文化財研究所
- 須田 勉 1998「龍正院跡・龍正院瓦窯跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3(奈良・平安時代)』千葉県
- 高木博彦・桜井茂隆 1980「八日市場出土の「千校尉」と記された墨書土器について」『史館』第12号
- 田形孝一 1997「黒潮満ちる道－八日市場市平木遺跡の再検討－」『平成9年度企画展 図録「古代の道と旅」』千葉県立房総風土記の丘
- 多古町 1985「[「多古町旧道図」について]」『多古町史(上巻)』多古町
- 寺村光晴 1994「荒海駅と荒海・磯部遺跡」『荒磯』成田荒磯地域学術調査会
- 戸村勝司朗 1997『多田遺跡群』(財)香取郡市文化財センター
- 戸村勝司朗・鬼澤昭夫 2001『長津台2号遺跡(2)』(財)香取郡市文化財センター
- 戸村勝司朗 2008『多古台遺跡群Ⅳ－No8地点の調査－』多古町教育委員会

- 西山太郎 1982「第5章 奈良・平安時代の八日市場」『八日市場市史 上巻』
- 沼澤 豊 1998「名木鎌部廃寺」『千葉県の歴史 資料編 考古3 (奈良・平安時代)』千葉県
- 萩原恭一 1988「郷名比定について」『東金市久我台遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 萩原恭一 1993『下総町不光寺遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 萩原恭一ほか 2021『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書38-多古町大塚台遺跡(1)～(3)』(公財)千葉県教育振興財団
- 原田亨二 1983「<速報>千葉県佐原市玉造上の台遺跡の調査」『考古学ジャーナル』No.222ニュー・サイエンス社
- 日高慎・吉澤悟ほか 2004『稲荷山 稲荷山遺跡調査会』
- 平川 南 2001「蝦夷戦争と鎮兵」『千葉県の歴史 通史編 古代2』千葉県
- 平野 修 2020「古代の塩生産と流通からみた移配エミシの役割-甲斐と駿河における予察-」『山梨県考古学協会誌』第27号
- 藤井一二 1986「荘所の構造と機能」『初期荘園史の研究』塙書房
- 道澤 明 2006「集落と畑の変遷について」『芝崎遺跡群』(財)東総文化財センター
- 山路直充 1998「八日市場大寺廃寺」『千葉県の歴史 資料編 考古3 (奈良・平安時代)』千葉県
- 山路直充 2012「海上・香取・匝瑳三郡の古代の寺」『房総古代学研究会シンポジウム 古代房総の地域社会をさぐる(2) -海上郡・香取郡・匝瑳郡を中心として-』